

甲斐駒ヶ岳 黒戸尾根
歳時図記



2012年10月16日



五合目

低緯度、黒潮の影響を受ける南アルプスは森林限界が高く、植生の変化が緩慢なものとなる。そのため、刃渡り辺りの二千メートル前後はおろか、黒戸山を過ぎた二千二百メートル付近の五合目においても、まだ、針葉樹が旺盛で、北アルプスや上越国境のような牙え渡る広葉樹の一面な色めきを拝めることは適わない。

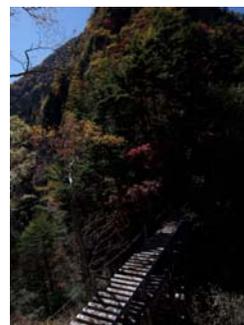
それではまったく魅力がないところなのか。答は否であろう。標高差二千メートルを越える黒戸尾根登山道の間点である刃渡りからの眺めは、そこに到達した達成感を満たすに足る雄大なものであり、雄大なものであり、樹海に潜む季節の彩りを原始性と荒涼さの中で味わうことができるのはおそらく他の山塊では適うまい。美術的興味があるかないかは、ひとえに観る側の山に対する感覚の問題といえそうだ。



黒戸尾根には合を示す道標はなく、一合目は登山口である竹宇と横手の駒ヶ岳神社それぞれとして、刃渡りを過ぎ最初の梯子場となる刀利天狗がその御嶽山ゆかりから三合目であるうか。以後、五合目小屋跡、七丈小屋、八合目御来迎場、九合目烏帽子岩と続く。

ここでは、五合目から一段上がった尾根路の平坦しばらく谷間辺りを六合目とした。二千四百メートルにしてようやく主役交代といった趣きである。

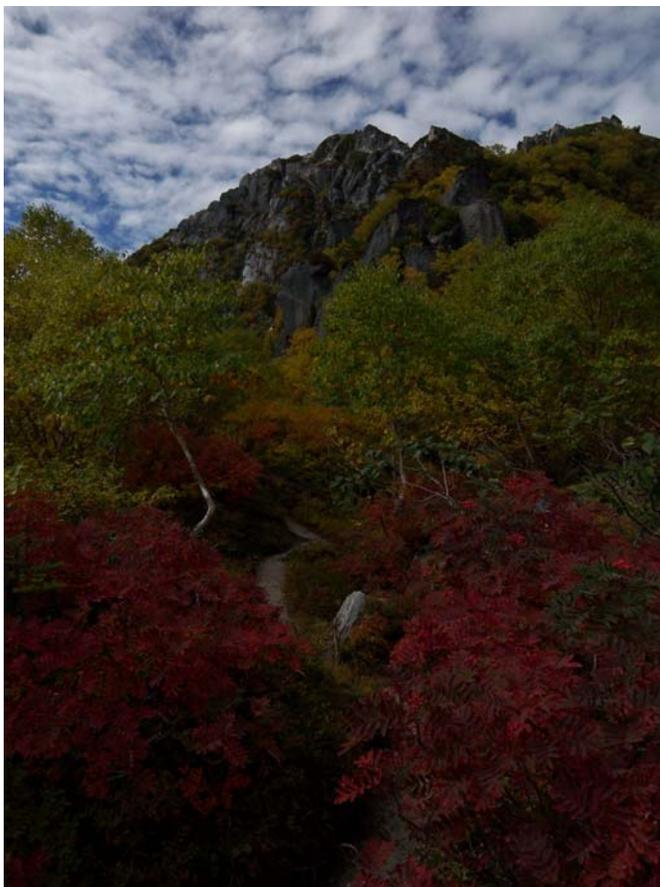
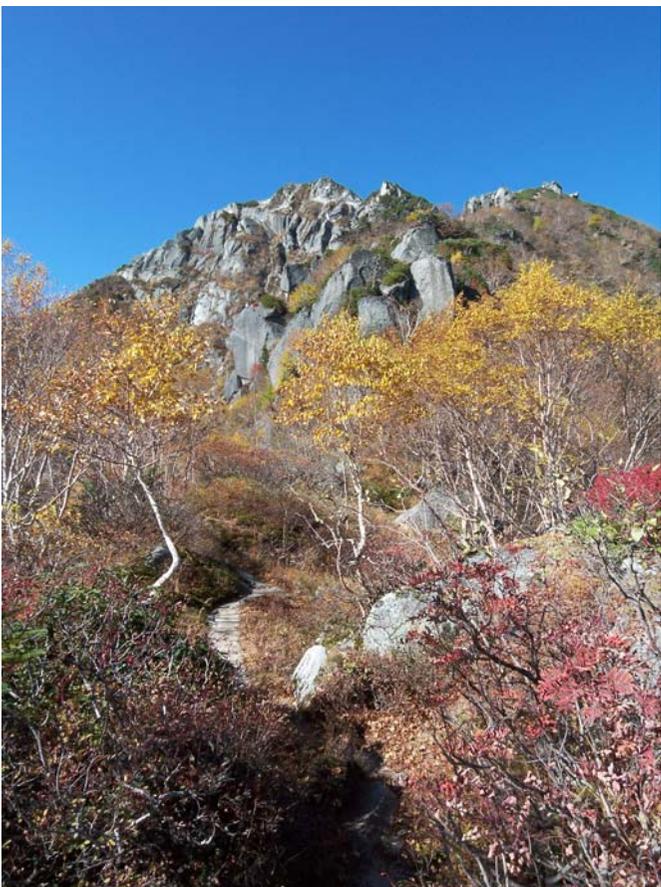
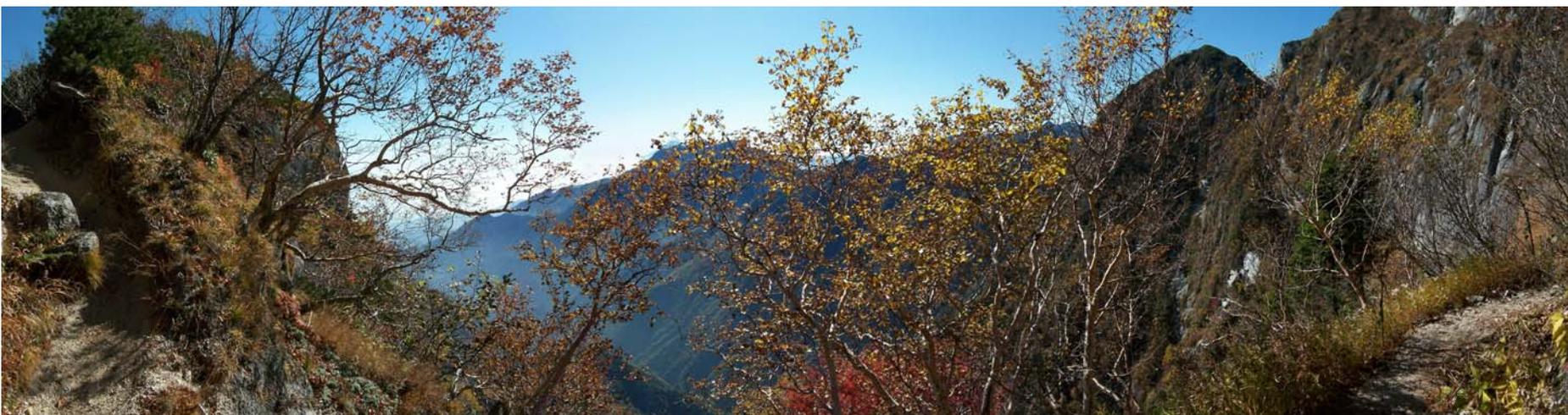
六合目





七合目

二千五百メートル前後の七合目には最盛期には四つの小屋が営んでいた。現在の七丈小屋と第二小屋、上下のテント場の地にあたる。いづれにしても紅葉の盛りに居留して移り行く時間を過ごすことは至福の極みに違いない。



八合目

ここから森林限界の上となる。七丈テント場からここまでが日帰り山行者にとって正直一番辛い。上の絵の右峰が摩利支天、かつてはここから八丈バンドとよばれる御中道で繋がっていた。信心深い請社方は七丈の小屋を夜発ちし、ここで御来光を拝み、支天社へそして山頂の本宮へと登拝していたことであろう。

この折はすでに紅葉の盛りも過ぎてしまったが、足繁く通う者にとっては感慨深い。なお、下右絵は同じ地の九月の趣きである。



九合目

烏帽子岩が象徴的なこの頂はすでに二千八百メートルを超え、鳳凰三山越しに富士を拝むことができる。北に黄蓮谷、南に地獄谷と呼ばれる赤石沢奥壁を挟むこの地まで至れば、喘ぎ登った苦しさも忘却し、時折垣間見れる雷鳥を愛でながら、至福な心持ちで山頂へ誘われていく。



山頂

二千九百六十七メートルからの眺めは眼下に八ヶ岳をしたがい雄大なものだ。

ただ、黒戸尾根から攻め上がった登山者の眼中にあるのは圧倒的な量感で聳える北岳であり、この高さでさえも南アルプス北部の盟主に比しては小太郎山な如くであると思いきらされる。

先人達の多くはまずこの地に立ち、思い思いのルートで山頂から山頂へ胸の中の朱線を引いていった。交通至便な今の世にいて、アルピニズムの香気を寸時嗅ぐだけの山行で満足している者としては頭の痛いこと常である。